

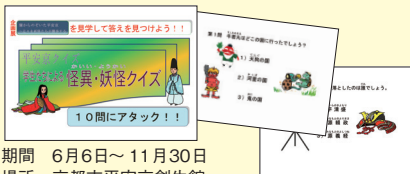
(日本人のDNAに組み込まれた) 妖しいもの



『百鬼夜行絵巻(写)』部分(国立国会図書館蔵)

京都市平安京創生館 企画展
闇からのぞいた平安京

～辻々を妖怪たちが闊歩する～



期間 6月6日～11月30日

場所 京都市平安京創生館

共催 京都学園大学人文学部歴史文化学科民俗学コース

佐々木先生のゼミ生たちが平安京にかかわりが深い妖怪や怪異について、展示パネルやクイズ形式で紹介しています。

時には恐ろしく、時には懐かしい感じがする妖怪。誰かが「見た」、あるいは「感じた」妖怪の話は、遠い昔から現代まで日本各地で、実にたくさんの人によって伝えられています。そして、何度となくブームが到来し、いつも子どもはもちろん、大人の心をもくすぐります。なぜ、私たちは妖怪に興味をそそられるのでしょうか？ 今月は、全国でも珍しい「妖怪文化論」という講座で教鞭を執っている佐々木高弘先生に、「妖怪」についていろいろお話しいただきました。



佐々木高弘(ささき・たかひろ)先生
京都学園大学 人文学部 歴史文化学科 教授
大阪大学大学院文学研究科博士課程中退。
専門は歴史地理学、文化地理学、民俗地理学。
神話・伝説・昔話で描かれる場所表現について民俗学・歴史学・地理学の観点から研究。
客観的に実在する場所や風景と、主観的に存在する人間の内面、精神や心理との関係性を、人文地理学の環境知覚研究の立場から探求している。主な著書に『民話の地理学』『怪異の風景学』(古今書院)、『京都妖怪案内』(だいわ文庫) など多数。

「妖怪」との出会い

「妖怪はいません」。妖怪文化論の授業はこのひと言から始まります。9年前にスタートした時、この言葉にショックを受けて帰っていた学生もいましたが、今ではこの珍しい学問を学ぼうと全国各地から集ってきてくれます。

そもそも私の専門は歴史地理学で、その理論の一つに、人文主義地理学というものがあります。そこで暮らしている一人ひとりを目を向け、その人の内面、思っていることや経験したことを見ることで、そこが意味のある場所だとわかる、という考え方です。木を見ることで森を知る、ということですね。さらに、その中に過去の想像上の空間を研究して、その意味を解読し、それを今後の町づくりに活かして、人が暮らしやすい社会を作っていくましよう、という分野があり、私はこの「想像上の空間」という言葉に捕まってしまうのです。

想像上ということは、「鬼の国」のことを



研究しても、「竜宮城」のことを研究してもいいのです。これだ、と思いました。ですが、そういう研究をしている人は日本にはいなかった。しかし、隣の研究室には「妖怪研究」で有名な小松和彦先生がいたんです。隣の研究室はよく見えるもので、ある時、民俗学の研究もしたいとお願ひすると、民俗学・歴史地理学共同の勉強会を夏休みにすることになり、その時の研究テーマが徳島に伝わる「首切れ馬」という妖怪だったんです。

聞き取り調査をしていくと現れる場所が決まっていることがわかりました。進めるにつれ、その場所に意味があるんだ！と私が求めていた研究と結びついたんです。それから妖怪の現れた場所を求めては、妖怪の聞き取り調査に出かけるようになりました。

「妖怪」は決まった場所に出る

妖怪は日本各地で語られています。中でもよく現れるのが、京都。さらに有名なスボットの二つに一条戻橋があります。鬼退治で有名な渡辺綱が鬼と出会ったのも、一条戻橋。そこから愛宕山へさらわれるのですが、途中、掴まれている鬼の腕を切り落とし、逃れます。その落ちたところは北野天満宮の回廊です。物語は全部創作で、史料上渡辺綱は確認できませんが、ここに出てくる場所は今も実在します。

ぜひ、古地図を持って出かけてもらいたいと思います。ですが、今と昔では町の形が変わっているので、できれば事前に今の地図に

古地図の情報を加えておくとわかりやすいです。今は、ビュンビュン車が走る賑やかな場所ですが、昔は日中でもここが怖い場所だったのです。昔の人たちは、なぜこの場所を妖怪が出る場所と名指ししたのか、その意味を考えると、平安京の人々の気持ちまでがわかってくる。また、そういうことを古地図に書き加えれば、立派な人文主義地理学という学問にもなるわけです。

「妖怪」とは？

最初に言いましたが、「妖怪」はいいません。私たちは超自然で不思議な現象や怪しい出来事を「妖怪」と名づけて呼んでいるんです。たとえば、どこからともなく「小豆を洗っているような音」が聞こえた↓「小豆を洗っている何か・もの」がいる・ある↓「小豆洗い」だ、と名詞になる。すると「小豆洗い」が主語になり、「出た」という述語を伴うようになります。するともうそこで「妖怪」の世界ができあがり、「どこで見たの?」「どこにいたの?」と次々と言葉が生まれていき、私たちは「小豆洗い」を共有できるようになります。これは海外にはありません。ルーズな日本語がよかったです。なんでも「名詞」にできるところが大きいんですね。今、目の前でノートが落ちたとしましょう。するとそれは「ノート落とし」のしわざです。何でもいいんですね。いくらでも生まれます。だから、『妖怪ウォッチ』のキャラもいくらでも出てきます。

学問で理解できないもの「妖怪」

私たちは学問として「妖怪」を取り上げ、研究しています。また、学生には歴史学や民俗学などを使って、「妖怪」が持つメッセージを説明できます。だからこれらがわからないと、「妖怪」はわからないよ、と言いたいのですが、生まれて5〜6年の小学生が『妖怪ウォッチ』に熱狂しているところを見ると、そういう学問では語りきれない何か、日本人にはあるとしか考えられないんです。そこそつと日本語を使ってきた日本人のDNAに組み込まれた何かがある、と思うんです。

それに、あらゆるものを妖怪にしてしまう、というのは、とてもいい考え方だとも思います。たとえば、野球で三振をしたり、宿題をしなかったり、いじめられたりしたら、努力が足りなかったんじゃないか、怠け心があるんじゃないか、好かれなない何かがあるんじゃないか、と考えてしまい落ち込むこともあるでしょう。でも、これらはすべて「妖怪のしわざ」にしてしまおう。「妖怪」が去つたらきちんとできる、と思えます。

これは、平安時代も同じで官僚が悪いことをするのは、妖怪のせいだったんです。だから、「大祓」という神事を6月と12月に行い、日常知らず知らずの内に犯し、身に付いた罪・けがれ・災いを落とすのです。

今年も6月30日に全国各地で行われますので、こちらも足を運んでみていただければと思います。みなさんの心に潜んでいる「妖怪なまけ」がいなくなるかもしれませんよ。